海外便り

香港の中の日本

西南学院大学経済学部経済学科准教授　伊佐勝秀

1. はじめに

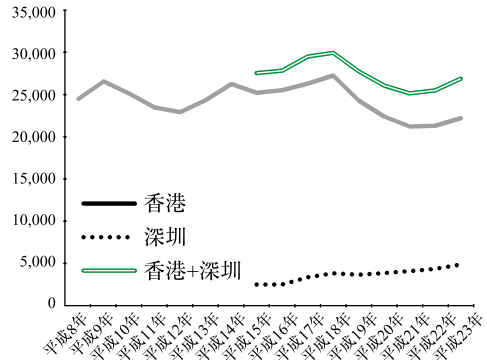
今回は「香港の中の日本」と題して，香港における在留邦人の動向，日本語情報，（意外な）日系企業，大衆文化などを取り上げたい。なお，以下の記述は決して網羅的なものではなく，話題の選択も筆者の独断と偏見に基づくものであることを，予めお断りしておきたい。

2. 香港の中の日本

2.1 在留邦人

外務省「海外在留邦人数調査統計」によると，平成 23 年 10 月 1 日現在の香港の在留邦人数は 2 万 2,184 人で，これは全世界の都市別では 9 位に当たる。図 1 に表されているように，香港返還の年である平成 9 年には 2 万 6,600 人で，平成 12 年まで減少した後，平成 18 年には 2 万 7,270 人まで増加したが，その後再び減少し，現在に至っている。興味深いのは，香港の後背地である深圳での在留邦人数の動きだ。深圳は平成 14 年までは都市別の上位 50 位にも入っていなかったが，平成 15 年に 2,352 人で初めてランク入りしてから，平成 23 年には 4,730 人まで増え，過去 10 年足らずで 2 倍以上に増加している。これは一説によると，住宅費など生活費の上昇の著しい香港を避け，地下鉄や住宅などのインフラ整備が進む深圳に居住し，MTR などで香港に通勤する在留邦人が増加しているためらしい。

図1　在留邦人数の推移



（出所）外務省「海外在留邦人数調査統計」

2.2 集住地域

日系不動産業者に聞いたところでは，香港島では太古（タイクー）や西灣河（サイワンホー），九龍では紅磡（ホンハム），新界では沙田や火炭（フォータン），そして離島では奥運（Olympic）などの MTR の駅周辺に日本人が多く住むマンションがあるという。新界にも集住地域があるのは，沙田に近い大埔（タイポ）に香港日本人学校（小学校）があるためらしい。また日本人観光客にも知名度の高い，香港島の銅鑼灣（トンローワン；Causeway Bay）には，日本人の経営する商業施設が多く点在している。

2.3　香港に関する日本語情報

在留邦人数の多さを反映して，香港では日本語による生活情報が様々な形で提供されている。まず，市販のものでは，

・ジェトロ（編）『香港に暮らす（第3版）』ジェトロ（地球ライブラリー），2011年

・『ハロー香港』（Gain Far East Co., Ltd. 制作・発行，各年版）

などがある。『ハロー香港』は日本でも3,980円で購入できるが，銅鑼湾の香港崇光（そごう）11Fにある旭屋書店で買えば180香港ドルで入手できる。

無料のものでは，

・『日刊香港ポスト』（隔週金曜発行；メルマガでの配信サービスもある）

・『ぽけっとページ 香港・華南』（各年版）

・『日経中国 香港生活』（各年版）

・『コンシェルジュ香港』（隔月発行）

などがある。上記の無料情報誌は，空港や市内の観光情報センター等には置いていないが，上記の集住地域に点在する商業施設等で入手できる。中でも『ぽけっとページ』は，副題（「日本人の生活情報便利帳」）の通り，様々な会社の連絡先が掲載されている。筆者はこれをみて，日系の歯医者やヘアサロン，旅行会社等をみつけることができた。

2.4　（意外な）日系企業

香港で生活していると，日本食品等の購入で日系小売店にお世話になることが多い。そこでまず，日系の百貨店やスーパー等について調べてみた。

文献によると(注1)，最盛期の1990年には香港に11社が存在し，特に激戦区の銅鑼灣では，大丸・松坂屋・三越・崇光（そごう）の4社がしのぎを削ったという。その盛衰を各社の資料等で調べてみると，表1のようになる。つまり，現在まで日系資本として営業しているのは4社に過ぎない。崇光や西武は今でも営業しているが，各々「利福国際」「迪生創建」という香港企業の傘下に入っており，商標を貸与しているにすぎない。

百貨店の衰退とは裏腹に，勢いがあるのがスーパーとコンビニだ。スーパーでは現在，イオンとユニーが市内で多店舗展開しており，特にイオンは香港に大型店だけで9店，広東省にも6店出店するなど，商圏拡大が著しい。これまではジャスコ（香港での表記は「吉之島」）などのブランドが併存していたが，2013年3月1日から「イオン（永旺）」にブランドが統一された。店内には「Living PLAZA」の名でダイソーが経営する12ドルショップや，主に日本語雑誌を販売する「東京堂書店」などが併設されている。筆者は埼玉県に長く在住した後に福岡市に移り住んだが，都市近郊在住で自動車を運転する機会がないため，これまでイオ

表1　香港における日系小売業の盛衰史

店舗名	開業	撤退
大丸	1960年	1998年
伊勢丹	1973年	1996年
松坂屋	1975年	1998年
三越	1981年	2006年
東急	1982年	1998年
八佰伴（ヤオハン）	1984年	1997年
崇光（そごう）	1985年	営業譲渡
西武	1990年	営業譲渡
イオン	1987年	営業中
ユニー	1987年	営業中
7-11	1981年	営業中
サークルK	1987年	営業中

（出所）津田邦宏（1999）『観光コースでない香港－歴史と社会・日本との関係史』高文研，p. 60；pp. 148～155など

ンやユニーにはほとんど縁がなかった。イオンは一部の都市社会学者から，日本の「郊外化」（市街地の空洞化）を推し進めた張本人として批判されているようだが，少なくとも香港では地域社会と調和しつつ一定の支持をえているように思う。日本と香港の事情を単純に同一視することはできないが，香港に来てからイオンをみる目が変わったのは事実だ。またコンビニでは，7-Eleven（以下 7-11）とサークル K（日本では「サークル K サンクス」）の店舗が目立つ。なかでもサークル K は，大陸では 7-11 かファミリーマートしかみたことがなかったので意外だった。ユニーは 2001 年 7 月にサークルケイ・ジャパン（株）を完全子会社化しているので，そのせいかもしれない。目視の限りでは，7-11 にひけをとらないくらいの店舗数がある。

他に気づいた（意外な）日系企業として，まず QB House がある。最初に郊外の商場（ショッピング・モール）でみかけた時には驚いた。地価の安い新界の大型ショッピング・モールを中心に，すでに 40 店舗も出店している。台湾やシンガポールなどにも出店しているという。狭いフラットでも出店でき，10 分 50HK$ でサービスを提供する手軽さが受けているらしい。最近は EC House という地場の類似業者まで出現している。

また「邦民日本財務」にも驚いた。これは「プロミス香港」のことで，二階建てバスのラップ広告や新聞の一面広告などを使って派手に宣伝している。過払い請求等による経営不振で SMBC グループの傘下に入ったことが印象に残っていたので，まさか海外でこれほど業容を拡大しているとは思わなかった。香港では 1992 年に営業を開始したらしいが，どれだけの香港市民が利用しているのか，気になる。そういえば，深圳の地下鉄でも広告をみた記憶がある。

変わったところでは，西松建設がある。九龍の佐敦（Jordan）に住んでいた頃，たまたま辺りを散歩していたところ，MTR の新線工事の表示が目に入った。施工期間などを確認したいと思い覗いてみたら，思いがけず「西松建設」の名前が目に入った。あとで調べたところ，同社は早くも 1962 年に香港営業所を設立しており，2012 年に設立 50 周年を迎えている。その間，ダムやコンテナターミナル，MTR，火力発電所，香港空港など，様々なインフラ整備事業に関わっている。いわゆる「B2B」企業であるため派手な広告を出すこともなく，社会で認知されにくい企業だが，このような企業が香港社会に貢献していることを知り，うれしく思った。

2.5　書籍

日本は「翻訳大国」といわれる。しかし香港の書店を眺めてみると，香港の翻訳文化のほうがすごいのではないかと思わされる。ものにもよるが，多くの日本の新刊が時を置かず出版されている。ジャンルは歴史や政治経済から料理，旅行，娯楽物まで幅広い。歴史では戦国時代の武将を扱った翻訳書が店頭に並んでいた。どうも「戦国無双」などのゲームの影響らしい。ただし出版社をよくみると，台湾の出版社である場合が多い。「同文同種」ということで，香港でも違和感なく読まれているようだが，翻訳の早さに加えて流通経路がどうなっているのかなど，気になる。香港の翻訳・出版事情に関する研究文献があれば読んでみたい。

マンガは，香港では一般書店にはあまり置いていない。しかし専門店は存在しており，九龍の旺角（モンコック）や新界の沙田などに新刊や古本を扱う専門店がいくつかある（特に「信和中心：Sino Centre」という雑居ビルが有名）。翻訳された新刊書が狭い店内にずらりと並んでいるが，ここでも香港のみならず（日本の出版社とタイアップした）台湾の出版社の存在感

が大きい。驚いたことに，「手塚治虫生誕 85 周年記念マンガセット」なるものが一般書店の本棚に並んでいた。講談社から以前出版された全集をばら売りにしたものだが，手塚治虫の生年が 1928 年であることに合わせた企画らしい。「85 周年」とは何だか中途半端な感じだが，香港でも手塚治虫は「漫画の神様」として認知され，漫画家や志の高いファンの間では「日本の漫画を深く理解したければ手塚治虫の漫画は必読書だ」と認識されているらしく，1 ファンとしてうれしく思った。

香港では公共図書館（全部で 57 館ある）で新聞や本を眺める機会が多いが，書棚の「900 美術 遊藝」コーナーには日本の漫画がかなり並んでいる。手塚治虫はいうに及ばず，『ドラえもん』や『名探偵コナン』，変わったところでは『水滸伝』（全 60 巻！）や『家栽の人』などが並んでいる。その中に，日本では読んだことがないが，どの図書館にも置かれている漫画があることに気づいた。戸部敬子『與光同行』（戸部けいこ『光とともに…－自閉症児を抱えて－』）という女性誌に連載された漫画で，作者は 2010 年に亡くなっている。日本ではテレビドラマにもなったらしい。内容は副題にあるとおり，自閉症児を抱えた夫婦の日々を描いたもので，作者の死により未完に終わっている。しかし『與光同行』は香港の関係者の間で広く読まれているようで，全 15 巻の巻末には多くの人々が感想や賛辞，推薦の言葉を寄せている。大半が元々，漫画に関心がなかった人らしい。近年の日本の漫画の海外での評価で伝えられることといえば「コスプレ」「アニソン」ばかりで，商業性の乏しい漫画は相手にされていないようだ。最近では「COOL JAPAN キャンペーン」などと政府まで悪のりする始末だが，政府には寧ろ，日本の漫画が海外で，このように多様な形で受容されていることをきちんと調査し，情報発信してほしいと思う。

2.6　キャラクターグッズ

ドラえもんとキティは海外，特にアジアでは日本のアイコンとして別格の存在感がある。ドラえもんは 2112 年 9 月 3 日生まれということで，九龍の尖沙咀（チムサーチョイ）にある巨大ショッピング・モール「海港城（Harbour City）」では，2012 年 8 月 14 日から 9 月 16 日まで「ドラえもん生誕 100 年前イベント」なるものが開催されていた。「征服世界」（http://www.cqw.hk/）という日本のキャラクターグッズ専門店もチェーン展開している。最近（？）は「輕鬆小熊」（リラックマ;「鬆弛熊」等とも表記）が人気があるらしい。2013 年は生誕 10 周年ということで，香港でも「7-11」など様々な企業とのコラボ企画が登場している。東京マラソンが開催された 2 月 24 日に，香港では「渣打香港馬拉松 2013」（スタンダード・チャータード銀行主催の香港国際マラソン）という大規模なイベントが行われたが，参加者の中にリラックマの着ぐるみで完走した走者の姿がテレビに映っていた。ちなみに日本では現在，熊本県の PR キャラクター「くまモン」が人気沸騰中らしいが，香港では全くといっていいほど知名度がない。

2.7　音楽

香港には「行人天橋（footbridge）」という，主要な駅や建物を縦横に結ぶ巨大な歩道橋のような通路があちこちにある。そこには歩行者だけでなく，ストリート・ミュージシャンもいる。楽器は様々で，ギターを弾く若者もいれば胡弓を奏でる年配の男性もみかける。そんな場所を歩いていると，思いがけなく中島みゆきの歌を耳にすることが時折ある。原曲にない転調が入っ

たりするが，それもご愛敬か。また，香港指折りの若者街である旺角では，狭い路上で演奏会やカラオケが毎晩，あちこちで行われているが，そんな中でも中島みゆきの楽曲が流れることがある。はじめは単なる偶然かと思っていたが，そうではないらしい。調べてみて，中島みゆきの歌と香港ポップスとは深いつながりがあることがわかった。きっかけは，大陸出身の香港の女性歌手フェイ・ウォン（王菲）が 1992 年に「容易受傷的女人」というタイトルで「ルージュ」をカバーしたことにあるらしい。また「維基百科」（中国語版 Wikipedia）の記事「中島美雪」によれば，彼女は華人歌手（主に台湾と香港）に最も多くカバーされている日本人歌手の 1 人で，その数は約 70 曲に上るという。香港では「ルージュ」の他に，「悪女」「糸」「ひとり上手」などを耳にした。中でも「糸」は人気があるらしく，香港最大の書店チェーンである商務印書館のある支店では，閉店 5 分前の BGM にこの曲が使われている。おそらく，ストリート・ミュージシャン達は原曲を知らぬまま，中島みゆきの楽曲を演奏しているのだろう。しかしそれは，彼女の楽曲が「スタンダード」として華人社会で広く受け入れられている証拠でもある。日本では昨今，素人演芸会の出し物のような歌ばかりが商業的な成功を収めているが，こうした実力派がアジアの国・地域で評価されていることを知り，うれしく思った。

2.8　テレビ番組

香港には，民間の「免費地面電視台」（無料の地上波テレビ局）は亞洲電視台と無綫電視の 2 局しかない。以前から複数の企業が新規参入を申請しているようだが，なぜか未だに認可待ちの状態にある。その意味で，香港では放送業界にも厳格な参入規制が存在しており，決して「自由経済」ではない。

私事になるが，筆者は日本では特に 2011 年 7 月に強行された地デジ化以降は，テレビをみる時間がほとんどなくなっていた。しかし香港では情報収集と語学勉強等の必要から，主に英語放送をみるようになった。その中で，思いがけず日本の番組を視聴する機会が多い。

関税がほとんどない香港では，世界中から様々な商品が集まる。そのため香港は「世界のショーウィンドー」ともいわれるが，テレビ番組も例外ではない。筆者は亞洲電視台の英語放送チャンネルである國際台をもっぱらみているが，そこでは欧米ではイギリス，アメリカ，カナダ，スペイン，フランス，ドイツ，アジアでは韓国，シンガポール，日本等の製作した様々な（英語）番組が放送されている。特にドイツは，公営放送 Deutsche Welle（DW）の情報番組が毎日のように放送されている。日本では視聴する機会のない番組ばかりで，いずれも興味深い。その中でもシンガポールの放送局が製作した “The Asian century” と “Almost Famous” という，アジアの国々を現地取材するシリーズが興味深かった。どちらも日本の若者も取り上げており，前者では「草食系男子（herbivorous man or grass-eating man）」，後者では「コスプレ」がテーマだった。特に前者では，インタビュアーに対してポケットに手をつっこんだまま回りくどい話し方をする 20 代と思しき男性が登場するなど，思わずため息が出そうな内容だった。これが現在，「サムライ」に替わって世界で流通しつつある日本男子のイメージなのだろうか？

日本語の番組は「ジャパナビ」という 30 分枠の日本の観光宣伝番組が，毎週日曜日の夕方に放送されている。しかしこれ以外にも，NHK の番組（主に吹き替え放送，時々字幕放送）がよく放送されている。最近では，動物ドキュメンタリーや「アジアン・ピッチ」の受賞番組，3.11

震災特番が放送されている。5，6年前の番組が放送されることもあり，情報の鮮度に難点がなくはないが，過去に見逃したドキュメンタリーの秀作を視聴できた時には何となく得をした気分になる。例えば,「ドキュメント72時間」というシリーズで2007年3月に放送された「福岡・人情屋台通り」という福岡市天神の屋台を取材した番組は，福岡市の観光資源としての屋台の魅力を香港人に紹介する番組として興味深かった。香港のある日本研究者が著書の中で「福岡市は舊香港（昔の香港）に似ている」と書いている(注2)。福岡市の中心部へのアクセスの良い福岡空港が昔の啓徳空港を思い出させる，屋台が「大牌檔」（香港式屋台）に似ている，というのが理由らしい。「大牌檔」は，公衆衛生行政の一環で1980年代にライセンスの新規発行が停止されたことなどにより数が大幅に減少し，現在では28店しか残っていないという（福岡市の屋台は約150軒あるとのこと）。市販の旅行ガイドや新聞広告などをみると，日本の観光地として人気があるのは，東京を別格とすると北海道や沖縄で，九州はやや影が薄いように思う。こういう番組がきっかけになって，香港人が福岡などの九州諸県にも目を向けてくれればと思う。

3. おわりに

香港の新聞では連日，政治経済から芸能ネタまで，様々な日本のニュースが掲載されている。その意味で，香港人の日本に関する関心は高い。しかし，「香港の中の日本」は良いイメージばかりではない。日本が1941年12月から1945年8月までの3年8ヵ月，香港を占領していたという歴史的事実がある。特に旧日本軍が発行し，香港ドルと強制的に交換させた臨時紙幣の補償を巡る「軍票（軍用手票）」問題は，国際法的には解決済みとされるが，戦後に至るまで関係者に大きなしこりを残している。この問題については，確認した限りでも日本語文献が8点（翻訳2点含む）出版されているが，知らない日本人のほうが多いのではないだろうか。香港では，学校の歴史の教科書で「日治時期的香港」として1頁が割かれているし，尖沙咀にある香港歴史博物館にも関連展示がある。先般の尖閣諸島騒ぎではまたぞろ「あの国は反日，この国は親日」のようなレッテル貼りがまかり通っていたが，不毛な言説だと思う。ある国や地域に「親日」になってもらいたいなら，まずはその国・地域と日本との歴史的な関わり合いについてよく知るべきではないだろうか。

本稿を執筆して，香港という異境にいることが，却って日本への理解を深める機会になりうることを感じた。しかし翻って筆者の知る「日本の中の香港」となると，アグネス・チャンやカンフー, 飲茶等のお粗末なイメージしかない。帰国後は「日本の中の香港」を探してみたい。

注

（注1）以下では，津田邦宏（1999）『観光コースでない香港－歴史と社会・日本との関係史』高文研，p. 60；pp. 148～155やインターネット記事などを参照した。また松坂屋と伊勢丹に関しては，杉山裕氏（大阪経済法科大学准教授）に資料照会でお世話になった。記して謝意を表したい。

（注2）呉偉明（2012）「給大牌檔一條生路！福岡給香港的借鑑」（同『知日部屋．2, 東京暴走搜查線：日本文化隨筆（最新増訂版）』香港：知出版有限公司，pp. 122～123）。なお著者は，香港中文大學日本研究學系の教授である。